The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂要覧
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90231
rights	
Note	

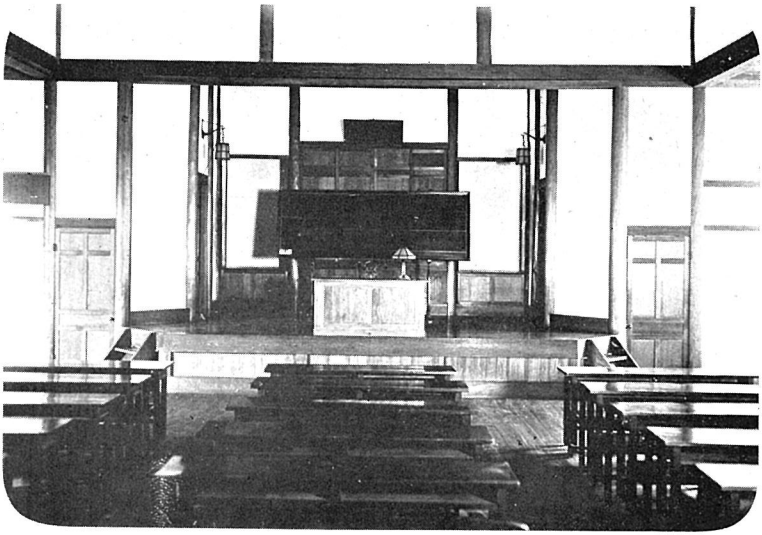
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

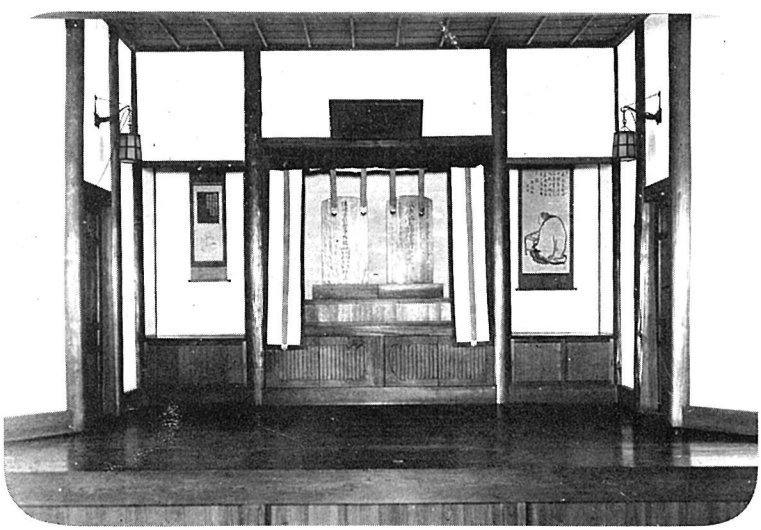
The University of Osaka

懷德堂要覽

懷德堂玄關

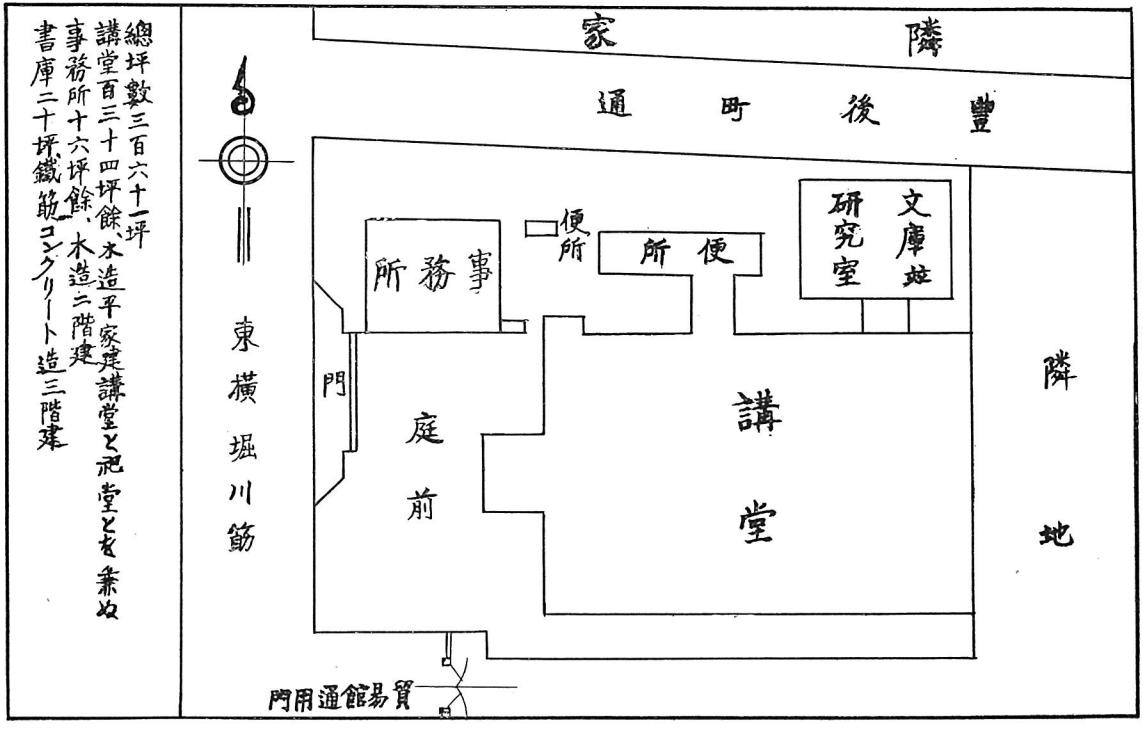


懷德堂大講堂



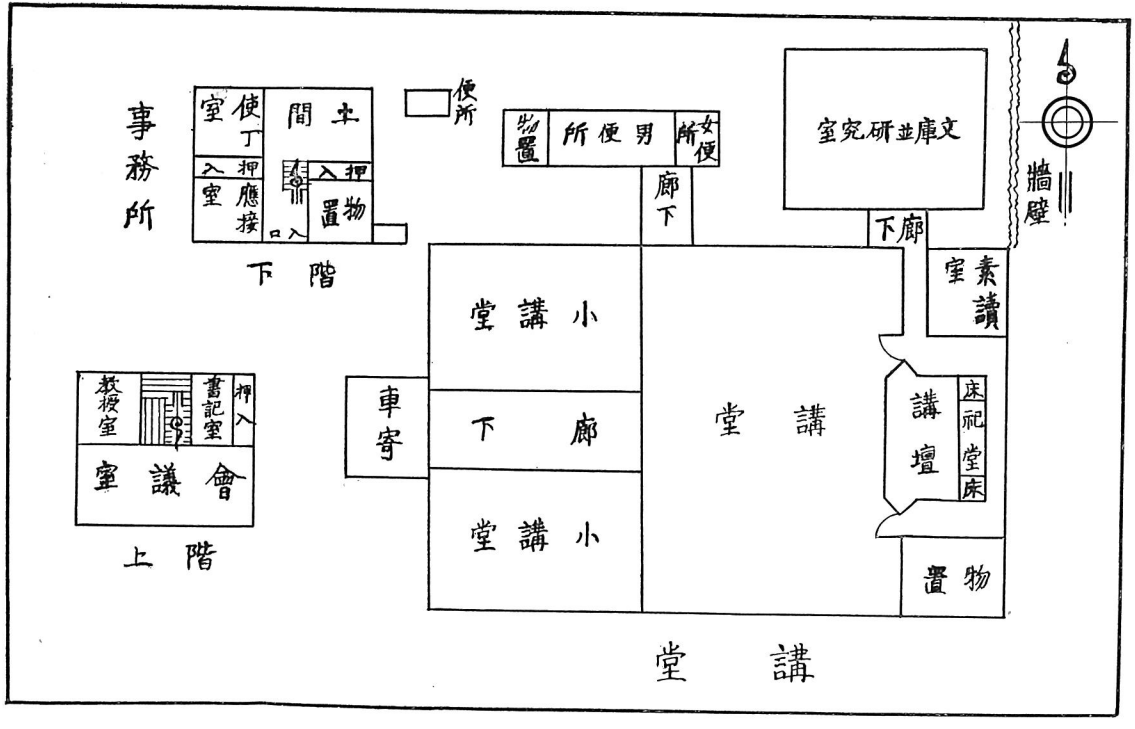
懷德堂大講堂正面祠堂

懷德堂平面圖



總坪數三百六十一坪
講堂百三十四坪餘、水造平家建講堂と祀堂とを兼ぬ
事務所十六坪餘、木造二階建
書庫二十坪、鐵筋コンクリート造三階建

懷德堂平面圖


事務所
使丁室
平間
便所
押入室
應接
押入
置物
口入
下階
物置
男便所
女便所
廊下
文庫並研究室
下廊
牆壁
素讀室
小講堂
車寄
下廊
講堂
講壇
床
祀堂
床
小講堂
物置
講堂
教授室
書記室
押入
會議室
上階

懷德堂要覽

目次

(一) 沿革

一、舊懷德堂略史……一

二、新懷德堂沿革略　附、年譜……一二

三、寄附行爲……二二

(二) 規則竝規定

一、講義講演規則……二五

二、素讀科規則……二六

三、懷德堂文庫閲覽規則……二六

四、懷德堂記念會奉祀規定……二七

(三) 事業

一、講義……二八

定日講義……二八

二、講　演……三〇
（甲）土曜講演……三〇
（乙）通俗講演……三六
三、素　讀　科……四四
四、恒祭幷記念講演……四五
五、孔　子　祭……四八
六、出　版……四九
七、奬　學……五〇
八、文　庫　公　開……五〇
（四）懷德堂學年曆……五〇
（五）顧問、職員、講師……五一
（六）財團法人懷德堂記念會役員……五二
（七）三年以上聽講繼續者及素讀修了者……五四
附　錄
堂友會附堂友會趣旨及同會則……五九

懷德堂要覽

（一）沿革

一　舊懷德堂略史（西村時彦懷德堂考抄錄）

大阪は古來商業の都會なれども、學問の開けしも亦久しく、町人文學の盛なる海内其比を見ず。和漢學は言ふも更なり、院本、小說、俳諧、狂歌に至るまで其門頗る多く、各特色ありて、其勢力も亦侮るべからず。今漢文學研究の方面を觀察するに、我が懷德堂を以て經と爲し、混沌社を以て緯と爲し、伊物崎其他の各派其間に襯映すと見るを得べきか。混沌社其他に關しては姑く言はず、懷德堂は實に享保九年に創まり、明治維新の際に一時廢絶し、時に隆替を免れずと雖も、大阪の文敎を主持すること實に一百數十年、久しからずとせず。石菴、甃菴に始まりて、竹山、履軒に盛んに、其學派の分布せる其勢力の盛なる昌平黌に繼げり。創學の年月に於て懷德堂より早きもの、長崎に立山書院あり、岡山に閑谷黌あり、幕府に昌平黌あり、肥前に東原庠舍ありと雖も、懷德堂が商業地の大阪に起

り、久しきに亘りて、以て民彝人道を講明せしは尤も誇るべき事實にあらずや。

懷德堂の創始を原ぬるに、其前身に多松堂あり。中井甃菴が三宅石菴へ入門せしより、甃菴同門の三星屋武右衞門、道明寺屋吉左衞門、舟橋屋四郎左衞門等と謀り、醵金して今の安土町二丁目北側に宅を買ひて石菴を住ませ、多松堂と名づけて講會の處となせり。これ正德三年の事なるが、數年の後石菴强いて高麗橋三丁目なる苧屋三郎右衞門の隱居屋敷に借宅せるより、享保四年多松堂も賣拂はれしが、此頃より備前屋吉兵衞、鴻池又四郎なども入門し、從游の徒も次第に加はれり。會々大火に遭ひて石菴平野に立退きしより、前記の武右衞門（中村晞峰）吉左衞門（富永芳春）四郎左衞門（長崎克之）吉兵衞（吉田盈枝）又四郎（山中宗古）の所謂る五有志は諸同志と謀つて、災後の地を尼ヶ崎町一丁目（今橋四丁目）北側なる吉左衞門隱宅にトし、又も此に講舍を建てたり。是れ實に享保九年五月の事にして、表口六間半、奥行二十間なりし、名けて懷德堂といひしは論語里仁第四の君子懷ㇾ德の語に取れり。十一月石菴の平野より歸りて此に住し、以て子弟に教授せむことを請へり。

時の將軍は八代吉宗公なりしが、嘗て近臣に向つて、京大阪にも學問所樣の處拵へ置き、忠孝の筋說き聞せたきもの、誰か願出づる者あるまじきやとの物語ありしを、大島近江守城中より歸宅して父の古心に物語り、古心は入魂の三輪執齋に心當はなきやと問ひしが、大阪には三宅石菴あり、人其德に服すれど左樣の儀願出づべきや心元なしとて、右の趣を執齋より豫て相識の門人甃菴に文通せり。

甃菴報を得て諸同志と謀りしに、若し官許を得ば、只今建立の懷德堂も長く退轉の憂なく、老師石菴の遺跡も永遠に傳はるべく、本望の至と衆議一決しけるが、今之を老師に告げなば恐らくは許可なからん、暫く之を祕すべしと爲し、甃菴專ら事に當りて江戸大阪の間を奔走し、其筋の注意もありて遂に願書は大阪にて差出すことゝなりしが、やがて町奉行より甃菴へ、願意聞屆けられ、學校地は諸役を免せらるゝをもて、學問所を取立て、長く退轉せざる樣に勤めよと申渡されしは十一年七月にて幕府の官學昌平校の創立元祿三年を去る三十七年後なり。斯くて更に當時の懷德堂の東隣なる尼崎屋の持地表口五間、裏行二十間を申立てゝ、此も許され、直に普請に取掛り同年八月には落成せり。此に至りて校堂の外に左右寮舍ありて、規模頗る大なり。普請の費用は五同志以下の義金による。然れば懷德堂は最初よりして敷地は恩賜、維持は義金といふ一種公立の性質なりけり。衆石菴を推して學主となし、甃菴を推して學問所預人とせり。石菴は以前より學校住居なりしが、以後甃菴も堂內住居となれり。

學問所の普請は八月に成就せしが、石菴始めて論語の講席を開きしは十月五日なりき。五井蘭洲聘せられて助教となり日講を主れり。並河誠所、井上赤水も一時講を助けたりしが、誠所は享保十二年の四月を以て東に歸り、尋いで蘭洲も亦東游の途に上れり。然れば石菴も享保十二年の夏頃より日講を手傳ひけるが、十三年の春に止みたれば、井上赤水一人となりしより、隔日の講となし、從來主と

して學校の事務を管理せし甃菴も專ら講說に從事しけり。三輪執齋は石菴の親友にして懷德堂創立の張本なり。然れば京都より大阪に來りし時には臨時の講あり。石菴沒後、伊藤東涯をも招請して講筵を開けりといふ。

石菴が享保十一年十月、懷德堂の玄關に懸けし壁書三ヶ條は平民的教育に重きを置けると、大阪町人の事情を參酌せる點に於て用意せられたるが、其文に

定

一、學問は忠孝を盡し職業を勤むる等之上に有之事にて候、講釋も唯右之趣を說すゝむる義に候へば書物不レ持人も聽聞くるしかるまじく候事

但不レ叶用事出來候はゞ、講釋半にも退出可レ有レ之候

一、武家方は可レ爲二上座一事

但講釋始り候後出席候はゞ、其差別有之まじく候

一、始て出席之方は、中井忠藏(甃菴を いふ)迄其斷可レ有レ之候事

但し忠藏他行之節者、支配人道明寺屋新助迄案內可レ有レ之候

以上

午十月

學問所行司

とあり。而して創學當初の教科に關しては懷德堂內事記は

一、日講の書は、四書、書經、詩經、春秋胡傳、小學、近思錄

一、毎月望、同志會合、老先生象山集要之講、右者毎年正月十五日初會にて、同志中燕集、老先生初講有レ之、後有レ故毎月之會は十六日に改む、

とあり、これによれば日講の書は皆是れ程朱の學なれども、石菴が正月初講及び毎月の講釋は陸子の學なり。要するに最初の懷德堂は實に朱陸併用なり、外朱內王なり、四書、五經、及び道義の書以外の雜書、或は表面詩文を講ずる事をも定約によりて禁じたりしが如し。

石菴は懷德堂創立後、僅に四五年なる享保十五年七月を以て病歿せり。石菴の歿後、甃菴懷德堂の學主となりて、學問所預人の名義をも兼ねたりき。甃菴は實に懷德堂創立の功臣なり。創學願立の爲に徒步にて江戸に往復すること前後六回、中間江戸にて大患に罹りしも屈せず、遂に其志を達せり。且石菴の高足として學德並に長じたる者甃菴に若くはなし。志尙同じからざる學者を聘せんよりも、甃菴をして石菴の後を承けしめしは情理に於て當然なり。以後中井三宅の二家は其宅を入易へて住めり。初め石菴甃菴並に堂中に住せし比は、皆客分の姿にて、普請造作賄方までも一切五同志にて引受けしが、甃菴の代となりて、世話人大に減じ、萬事舊の如くならざるより、甃菴は殘れる五同志の富永芳春、吉田盈枝、山中宗古の三人と協議し、學校の事一切を甃菴一人にて引受ける事とせり。是に

至りて懷德堂維持の制度は一變せり。

既にして創學二十餘年を閱し、堂舍も頹圮して、支へ難きより、甃菴奮然として新築を思ひ立ち、大工共に向ひて、學校資金の餘裕を待つて工事を興さんには、我等存命覺束なし、先づ普請を成就せしめ、後五年を期限として追々に支拂ばやといひしに、甃菴の人格に服せる事とて、衆工爭ふて役に就き、學校は後世の模範なり、堅固に造作せんことと、我等の面目なり、賃銀は問ふ所に非ずと、手を揃へて夜を日に繼ぎ、僅々十餘人の大工にて、寶曆元年の正月に始り、六月には普請出來し、人皆其神速に驚きしといふ。甃菴時に年六十なり。是に於て堂舍一新して煥然觀を改めたり。而して節省儉約よく工費數百金を期限の如く償へり。此の大土木の成就せしは鴻池又四郎の如き篤志の尠からぬ寄附を爲せるにもよるが、甃菴の堅節と材幹無んば焉ぞかゝるを得ん。甃菴の大阪の文敎を裨益せし功德決して忘るべからざるなり。甃菴の德性を重んじ踐履を尙びしこと此の如し。而して著述は其好む所に非ず、寶曆八年六月歿す。二男あり、長は竹山、次は卽ち履軒なり。

甃菴歿後の學主は當代の耆宿なる蘭洲を持すべきこと當然なり。懷德堂創立の初め、講師を求むるに當りて、甃菴は蘭洲にして諾せずんば、書院は無きに等しと、蘭洲よつて諾し、始て講を開きしに非ずや、蘭洲東游十餘年にして歸れば、甃菴病氣勝にて日講も絕々なりしを、蘭洲徐々に學規の振作を說き、甃菴も亦喜んで敎授を助けんことを請ひ、再び懷德堂に助敎として經を講ずるに至れり。よ

つて蘭洲は住居を歸阪後五年の寛保三年九月に堂中に移せり。されど年已に老い、且表面に立つを好まざりしより、春樓先師の子たるを以て學主となり、竹山預人となれり。世の懷德堂を說く者、重きを石菴、甃菴に置きて蘭洲の功績を知る者蓋し希なり。蘭洲の懷德堂に於ける、常に助敎の地位に甘んじて一たびも學主預人とこそ爲らざれ、懷德堂の敎育に關し、將又大阪文學の根柢を養ひし點に關し、其功績却て石菴、甃菴の上にあり。

蘭洲經を執て徒に授くる事二十年、初め堂規を揭ぐるや、石菴は無緣の人は叨に講席に入るを禁じたりしが、蘭洲西歸の後、尼ヶ崎町の年寄川井立牧より、無緣の人にも聽講せしめられては如何との申込あり。蘭洲の意見にて町內丈は無緣の人にても苦しからざる事に定めたり。此に至りて懷德堂の講義は半公開の姿となれり。次に席順なるが、最初の壁書に武家方は上座たるべき事とありしを

一、書生の交は貴賤貧富を論せず、可レ爲二同輩一事

但し大人小子の辨は可レ有レ之候、座席は新舊長幼學術の淺深を以て面々可レ被レ致二推讓一候

と改め、階級制度の嚴なりし時代に學問上は貴賤貧富の差別を認めず、士民平等の思想を表白せしは懷德堂の特色を見るべし。第三は寶曆八年八月蘭洲等連署の懷德堂定約附記なり。舊定約には、學主の任は父子相續を許さざりしに、附記には學主死後、適當の人を求め難くして、其子弟に相應の人あらば、相續苦しからざることに改め、次に舊約には、學主預人（公務）、支配人（町務）を置くこと

なりしも、支配人は無用なるをもて、學主は教導を司り、預人は公務を引受くることゝなし、學主預人を兼ねるを許さずと改め、更に講師助講の事を記して、學德ある人を招請して講談を依賴すべしと爲し、次の一條あり。

一、四書五經道義の書而已講談いたし、他の雜書講候事一切無用と申義に候へ共、餘力に詩賦文章或は醫師をも心懸候人へ、內證にて講じ聞せ、或は會讀にいたし、或は詩會文會等致候事は格別の義と存候、萬年も內證にて醫書詩集等講じ聞せ候事も有之候、但し表向の講談に致間敷事は定約の通可レ爲二勿論一候

舊約には人寄の爲に詩文を講ずるを禁じ、從來の懷德堂は道學を主とし、これによりて風教を正しくせんと期し、文華の觀るべきものなかりしを、蘭洲に至りて學力の根柢も深く、詩文にも長ぜしより華實並び收めんと此に學規を改めしは、懷德堂學風の一變と謂ふべく、他日竹山、履軒等の經術文章其盛を致して、海內の欽仰する所となりしは、由來する所ありといふべし。寶曆十二年三月蘭洲歿す時に竹山三十四、履軒三十一、已に鬱として一家を成せる者は實に蘭洲の恩なり。

これより前、寶曆七年八月、春樓大學を開講し、同じく九年蘭洲中風に罹りしより、代つて易傳を講ず。竹山は預人なれば其專職は公務にあれど、學主の春樓病身の爲に臨時に易傳の助講每々なりけるが、寶曆十一年九月以後、二七の朝講は竹山引受け、其後蘭洲も物故せしより、預人を以て教授を

兼ね、近思錄其他の諸書を講じたりといふ。春樓學主たる事二十五年にして天明二年十月歿す。春樓歿後は竹山代りて學主となり、預人を兼ねたり。春樓學主たりし間は、竹山は預人なり、後輩なり、意の如くならず、教授片手に著述に從事して獨り儒法を守りしが、此に至りて學校建立の趣意に返り儒風を振興すべきを述べ、諸同志も其意に從へり。竹山は學問の宗旨を明かにせんが爲に、先づ白鹿洞學規を巨板に新刻し、開講の日、之を講堂の楣上に掲示し、以て程朱の學を標榜せり。此より二七の朝講は尚書、夜講は近思錄、其他、伊洛淵源錄の會談、大學の開講、左傳の會讀を始め、更に詩會をも開き、朔日、十五日の休日の外は、間斷なく學課を督勵せしかば、宿弊一洗して、學風大に振ひ生徒日に進みて盛を一時に鳴らすに至れり。

寛政四年五月、大火の爲に懷德堂も全部類燒し、重立ちたる同志も火災に罹らざるなし。竹山一期の心配は學校の再建なり。享保の前例もあれば公儀普請を願ふの外なく、尚此機會に學校を擴張せんと思ひ、城代堀田侯に内願し、堀田侯の贊同を得て、樂翁公及び松平和泉守、堀田相模守などに出入して學校再興を願出しに、何れも舊交の諸侯なれば願意を聞置かれ、一先づ大阪に歸り、表立ちて町奉行所に願出づべしとの沙汰なり。よつて直に町奉行所に願出で、是の歳は何の事もなく、翌五年三月、學校繪圖面を差出すべしとあり。因て懷德堂元敷地二百三十坪の上に添地を願ひて、聖廟拜殿文庫教授住宅等をも建築すべき繪圖一枚と、聖廟等は取止めて、元敷地の儘に、講堂學寮等をも增建す

べき繪圖一枚との二通を差出したり。されど再三見積の變更を命ぜられ、減額に減額を重ねて三年の哀願に贏ち得し所、僅々三百兩の補助に過ぎず、所詮豫定の校舍再築は出來難きも、寛政七年八月鋤始、先づ學校より着手し、次に門塀、次に玄關講堂、東西房に及び、追々建立して、翌八年七月竣工工費總計七百餘金に及びしに、公金三百兩の外は、同志門人の働きにて滯なく濟みたりしは、竹山の學德力量に依れり。蓋し甃菴の寶曆度の講舍改築と並んで永く銘記すべき事柄たり。

寛政八年に學校再建成就して、竹山の志成りしと共に、長子蕉園の天才人に絕し、學業大に進みければ、翌九年八月を以て竹山隱退を告げ、蕉園をして家名を相續せしむ。尤も學主は竹山にして、學校預人の名義は之を蕉園に讓れり。されど蕉園は享和三年八月を以て逝き、竹山も亦蕉園病歿の翌年なる享和四年、卽ち文化元年二月を以て懷德堂の正寢に終れるより、其遺言により弟履軒和泉町の水哉館に在りしが、月々四九の講席のみは受持ちたりき。此に再び履軒と懷德堂との關係を生じたり。元來履軒も竹山と同じく幼より懷德堂に育ちしも、二男の事とて壯事は表面學校の事に携はりしことなく、一時竹山の不在中學校の世話を爲しき。されど履軒は本來水哉館に割據せしより、文化元年竹山逝去に至る迄の三十六七年間は全然懷德堂に關係せざりき。履軒の懷德堂講經は何年迄繼續せしや記錄なし。要ずるに懷德堂は竹山死するも、履軒巋然として猶存せし間は、江戸の昌平黌と對峙して關西唯一の學府の重鎭たりき。

竹山歿後の懷德堂は別に學主を置かずして預人と教授とより成り、教授は履軒なりしが、履軒歿後預人兼教授たりしは竹山の第七子碩果なりき。竹山、履軒の盛時に繼ぎて懷德堂の名聲を赫々たらしめんことは何人も困難を免れず。碩果は此困難なる時代の繼承者となりしより家學を恪守して既成の業を保持するに力め、高く自ら標置して四方俗儒と交游せず、懷德堂の學風斯に至りて又一變せり。

文政八年六月は懷德堂が幕府の官許を得たりし創學壹百年に當りしより、其旨屆出ければ、市尹より緒を承くること永久にして先業を墜さゞるを賞し、之を將來に傳へて永世渝らざらんことを戒飭せり。碩果は天保十一年三月、病歿せり。是より先き姪の並河寒泉を養うて嗣となし、碩果は教授、寒泉は學校預人となりしが、後寒泉本姓に復せしより、更に從弟柚園の子後桐園と號せしを養ふて嗣と爲せしが、碩果歿後、桐園を學校預人と爲し、寒泉は教授となれり。

寒泉、桐園の懷德堂を管理せしは、天保十一年より、明治二年に至る三十年間なり。寒泉の學は一に程朱を尊奉して、多岐に涉らず、門下に課するに經史兼修を以てし、諸子は喜ばず。實學實行を主として、文華に騖せ德行に疎なるを厭ふ。要するに、碩果以來閉鎖退嬰の方針に出で、寒泉、桐園皆其風を守り、學校の中に割據せしかば、竹山時代の大學は此に名實共に一鄕校とは爲れり。然れど儒林の世業を紹ぎ、學風の醇粹を期して、人をして正學此に在るを知らしめて、以て歸嚮する所あらしめしは、世道人心に裨益せしこと尠からず。而して懷德堂掉尾の事業として、寒泉、桐園の力を盡し

しは、文庫の建築、逸史の上木、聖廟創建の企等なりき。伏見鳥羽の戰ありて、大阪も人心恟々、懷德堂も一時業を休みてありけるが、やがて騷亂も鎭まりしより、以前の如く教授を始めたり。此頃に於ける特筆すべき事柄は明治元年の山階宮晃親王の懷德堂へ台臨あらせられしことなり。

王政維新の後は、學問上にも大影響ありて、新しきを尙び、舊きを厭ふ時代の傾向は、洋學の天下となり、懷德堂も門前の雀羅を奈何ともする能はず、頽勢の支持すべからざるを知り、校門を閉せしは明治二年十二月、一時廢絕の已むなきに至れり。懷德創立の享保九年を去ること一百四十有六年なり。

二　新懷德堂沿革略　附、年譜

懷德堂學徒離散して、絃誦の聲を絕つこと四十年にして、復興の氣運は茲に復た開けぬ。而して實に其端を大阪人文會に發せり。人文會は前大阪府立圖書館長今井貫一君の首唱に係り、大阪人文の發達を討査し、闡幽發微、以て文化と風敎とに貢獻せんとする在阪好學の士より成りしものなり。

明治四十三年一月、會員西村時彥君、其例會に於て懷德堂敎授たりし五井蘭洲の傳を講演せしに、講畢りて後、懷德堂師儒諸先生の爲に公祭を擧行せばやとの議、期せずして衆口より發し、全會一致之を可決せり。是より先き、中井竹山の曾孫中井木菟麿君は重野成齋の紹介を以て、大阪市史編纂員幸田成友君と共に西村君を訪ひて、懷德堂公祭の擧に謀り及べりしが、時未だ到らずして其事中輟せり

此に至りて人文會首唱實行の責に任ずることゝなりしは會員全體の篤志に出づるなり。是れ實に懷德堂復興の濫觴にして、又現在懷德堂記念會創立の發端なり。人文會の議に曰く、懷德堂は幕府の保護と志ある市民の協力とに成りし公立の學問所なり。然れば公祭は大阪人文會の私すべきに非ずして、大阪府教育會は勿論、懷德堂に緣故深き鴻池善右衞門君、住友吉左衞門君を初として、同志の紳士に請うて發起人たらんことを以てすべしと。因りて同年九月、西村時彦君は會の決議を齎らして、歷訪勸說せしに、皆深厚なる同意を表し、此の擧の世道人心に大なる關係あるを贊し、奮て發起の責に任ずべしとの快諾を得たり。斯くて九月二十五日發企人會を開き、其互選に由り、住友吉左衞門君を會頭に小山健三君を副會頭に推し、會則を議定し、會に命くるに懷德堂記念會の名を以てせり。かくて會の成立するや、先づ之を中井家遺族及び舊故に告知し、會の宗旨とする報本反始の義を明かにし、次に新聞紙上にて會の成立を江湖に告白し、又學術講演會を開きて、會の趣旨を普及し、汎く有志の入會を勸誘せしかば、會員を得ること、南は九州、北は北海道に亙り、特別會員六百二十二名、普通會員一千三百七十名の多きに上れり。

明治四十四年十月五日、懷德堂開講記念日を以て、大阪市公會堂を用ひて祭場とし、儒禮に依りて祭典を執行し、六日七日の兩日を以て、東西兩大學の碩學を聘して、記念學術講演會を開き、同月一日より六日に至るの間、中井家を始め諸家襲藏の懷德堂先賢遺書遺物を展觀し、更に懷德堂師儒の遺

著十種（萬年先生論孟首章講義、甃菴先生五孝子傳、富貴村良農事狀、竹山先生蒙養篇、貞婦記錄、蘭洲先生茗話、勢語通、竹山先生奠陰集、國字牘、履軒先生論語逢原）を選擇編纂して、懷德堂遺書と題し記念刊行せり。

明治四十五年三月、剩餘金六千餘圓處分協議會を開き、剩餘金を基本資産とし、本會と同一の目的の下に更に、法人組織の懷德堂記念會を創立し、有終の美を濟さんとの議を決し、五月に至り委員の手になれる寄附行爲案の脫稿を見しも、設立者の推薦に幾多の時日を費せし時、恰も明治天皇登遐の事あり。國民考妣を喪せしが如く、荏苒星霜を更む。大正二年六月に至りて協議會を開きて、寄附行爲案を可決し、財團法人懷德堂記念會設立者として、永田仁助君、西村時彥君、今井貫一君、水落庄兵衞君、廣岡惠三君を推し、同月三十日法人設立を出願し、八月二十日許可せらる。次で永田仁助君を理事長に選擧し、九月一日法人登記を得たり。

大正三年本會の目的及事業の計畫畏くも　天聽に達し、同年三月五日金貳百圓を下賜せらる。同四年六月、講堂敷地として府立大阪博物場西北隅なる三百六十一坪の無償使用許可を得、懷德堂重建の議茲に決し、同年十月地鎭祭を執行し、同五年九月工を竣ふ。是れ復興されたる今の懷德堂なり。是に於てか教授を聘し、主として講義の事に當り、堂務統理の事に任ぜしむるの議を決し、同年十二月廣島高等師範學校教授文學士松山直藏君を聘して懷德堂教授とす。是より先き、十月十五日開堂式を

學行し、十一月四日京都帝國大學文學部教授を聘し、定期學術講演會第一回を開き、爾來毎月二回開會す。

同六年一月、會計規則、講義規則を定む。理事西村時彦君に講師を囑託す。一月二十七日開講式を學げ松山教授大學首章を講ず。同年四月素讀科を設け、波多野七藏君に教師を囑託す、五月より教授を開始す。京都帝國大學助教授文學士吉澤義則君に講師を囑託して、五月より萬葉集講義を開始す。十月十四日記念祭恒典を行ふ。

同八年二月吉澤義則君講師を辭す。第三高等學校教授文學士林森太郎君に講師を囑託す。三月文學士武内義雄君に講師を囑託し、支那に留學せしむ。四月通俗講演規定を定め、六月第一回通俗講演を開く。九月より日曜朝講を開始す。

同九年二月波多野七藏君教師を辭す、吉田鋭雄君を教師とす。十月十日記念祭恒典を行ひ、兼ねて本堂先師儒諸先生の贈位を報告す。十月教育勅語謄本を下附せらる。三十日教育勅語渙發三十年に相當するを以て、勅語捧讀式を學行し、西村講師勅語を謹講す。十二月武内講師支那より歸る。

同十年一月開講の日を以て、教授教育勅語を捧讀し、爾來毎年の恒式と定む。同月より定日講義を增加し日曜朝講を合せて毎週四回とす。

同十一年十月八日午前記念祭恒典を行ひ、午後孔子歿後二千四百年記念事業として孔子祭を行ふ。

十一日元老松方公爵堂に臨み、堂内一巡の後堂の事業現況につきて教授の説明を傾聽せらる。

同十二年三月武内義雄君東北帝國大學教授に任命せらる。同年四月大阪高等學校教授文學士財津愛象、文學士稲束猛二君に講師を囑託す。同月より毎週一回文科講義を開始す。同七月二十七日畏くも本會事業の狀況　天聽に達し、金參千圓を下賜せらる。十一月吉田鋭雄君を講師とす。同月文部省在外研究員を命ぜられ、支那に向け出發す。十二月孔子歿後二千四百年記念事業の二たる校印論語義疏成る。

同十三年五月二十二日江木文部大臣堂に臨み、堂内を一巡して後、熱心に堂の沿革事業現況につきて教授の説明を聽取せらる。七月三十日宮内省御用掛にして本會の評議員兼講師なる西村時彦君歿す。八月十日遺骨を堂に安置し、翌日追悼祭並に告別式を行ふ。

同十四年六月、講師吉田鋭雄君支那より歸る、助教授とす。懷德堂文科學術講演集同百科通俗講演集各第一輯成る。七月二十九日西村家の請に依り故西村時彦君一年家祭を堂に行ふ。八月五日より十二日に至る一週間、支那學講習會を本堂に開く。九月七日、故西村博士記念會より、同博士舊藏書全部を碩園記念文庫の名を附して保存すべく、本會に寄贈せらる。同月十八日、永田仁助君より漢學奬勵の爲め、奬學資金五萬圓を寄附せらる。十月二日江木司法大臣堂に臨み、堂内一巡の後、教授より堂の沿革事業現況につきて説明するところあり。

同十五年四月十六日若槻總理大臣堂に臨み、堂内を一巡せらる。堂の事業現況につきて教授より説明するところあり。五月二十七日、懐德堂書庫並研究室地鎮祭を執行す。六月一日起工す。七日　久邇宮殿下同妃殿下御同列にて本堂に成らせらる。松山教授より懐德堂の歴史、懐德堂記念會の由來、本堂にて現に行ひつゝある事業の大要を御説明申し上げ、尚懐德堂遺書、記錄、懐德堂記念會出版物などを台覽に供し、今井理事、松山教授交々御説明申し上ぐ。七月懐德堂文庫閲覽規則及び懐德堂記念會奉祀規定を定む。九月懐德堂漢學奬勵規定並同給與規定及び懐德堂職制を定む。十月三十一日書庫並研究室工を竣る。十一月六日記念祭恆典を執行し、本堂重建後に於ける物故講師西村時彦君外二名、物故功勞者住友吉左衞門君外七名の奉祀をなし、併せて創學二百年、重建十年の記念式典を擧行す。是日　久邇宮家より金壹萬疋を下賜せらる。

昭和二年三月十日理事長永田仁助君歿す。四月二十三日教授文學博士松山直藏君歿す。松山教授死亡の爲に日曜朝講を廢す。十月九日理事小倉正恒君理事長に就任す。十二月十二日講師文學士稲束猛君歿す。

同四年四月一日大阪高等學校教授文學士財津愛象君を聘して教授とす。同日大阪高等學校教授文學博士秋月胤繼君を講師に囑託す。六月四日　今上天皇陛下大阪に行幸、甘露寺侍從を差遣あらせらる。十月十日評議員野々村政也君理事に就任す。同月十二日記念祭恆典を行ひ、併せて物故教授文學

博士松山直藏君、講師稲東猛君外四名、竝に物故功勞者永田仁助君を奉祀す。十一月二十九日理事田中隆三君文部大臣に任ぜらる。

同五年三月五日理事田中隆三君辭任す。四月二十四日理事野々村政也君歿す。

同六年五月一日田中文部大臣來堂、財津教授本堂事業に付說明す。十月四日財津教授歿す。十月七日本堂に於て故財津教授の告別式を執行す。十月十日評議員江崎政忠君理事に就任す。

同七年九月一日元大阪朝日新聞社奉天支局長岡山源六君を講師に囑託す。十月二十六日伯爵清浦奎吾君來堂、小倉理事長、今井理事本堂事業に付說明す。十二月三十一日講師林森太郎君辭任す。

同八年三月一日元熱田中學校長文學士大塚末雄君を講師に囑託す。是より定日講義を毎週四回とす。四月十三日第三高等學校教授文學士阪倉篤太郎君を講師に囑託す。九月二十二日中井木菟麿君より舊懷德堂遺物一部四十七點の寄贈を受く。

同九年三月三十日文科講義を廢す。四月一日元廣島高等師範學校教授文學士武藤長平君を講師に囑託す。是より定日講義を毎週五回とす。但し通俗講演の當日は休講の事とす。四月十四日滿洲國國務總理大臣鄭孝胥君來堂、吉田助教授本堂事業に付說明す。六月二十六日顧問文學博士內藤虎次郎君歿す。

同十年六月十一日子爵齋藤實君來堂、今井理事本堂事業に付說明す。十二月十九日　東久邇宮殿下

御成、小倉理事長、今井理事本堂事業に付御説明申上ぐ。

同十一年四月十四日北平清華大學教授劉文典君來堂、十日間碩園文庫の楚辭に付研究す。六月十日安井大阪府知事、富田警察、土居經濟兩部長來堂、本堂事業に付聽取せらる。八月十七日滿洲國前國務總理大臣鄭孝胥君書を小倉理事長に寄せ、金參千圓を本堂基金として寄附せらる。十月一日西村時彦君遺著碩園先生遺集五冊を印行す。同月十日記念祭典竝に重建二十年式典を行ひ、併せて物故教授文學士財津愛象君、顧問文學博士内藤虎次郎君、講師佐々木恒清君外六人、竝に物故功勞者男爵鴻池善右衞門君外四人を奉祀す。

附、年譜

大正　二、年　八、月　二〇、日　財團法人懷德堂記念會設立許可

三、　三、　五　金貳百圓　御下賜

四、　六、　府有地無償借用許可

五、　九、　重建懷德堂竣工

五、一〇、一五　開堂式擧行

五、一一、　四　定期講演第一回開會、爾來毎月二回開會

五、一二、　文學士松山直藏君を聘して教授とす
六、一、二七　開講式擧行、爾來每週二回定日講義
六、五、　素讀科開始
八、六、　通俗講演第一回開會、爾來每月一回開會
八、九、　日曜朝講開始
九、四、　定期講演回數を增加して每週一回とす
九、一〇、　教育勅語謄本下附
九、一〇、三〇　教育勅語捧讀、式擧行後勅語謹講
一〇、一、　教育勅語捧讀式擧行、爾來每年一月開講日を恒式日と定む
一〇、一、　定日講義每週一回增加
一一、一〇、八　孔子祭執行（孔子歿後二千四百年記念事業之一）
一二、四、　文科講義開始
一二、七、二七　金參千圓　御下賜
一二、一二、　校印論語義疏並校勘記成る（孔子歿後二千四百年記念事業之二）
一四、六、　懷德堂文科學術講演集第一輯、同百科通俗講演集第一輯印行

一四、八、　支那學講習會を開く
一四、九、七　故西村博士記念會より同博士遺書全部を寄贈
一四、九、一八　永田仁助君より漢學奬勵のため奬學資金五萬圓寄附
一四、一一、　重印懷德堂考成る
一五、六、七　久邇宮殿下同妃殿下台臨
一五、一〇、　書庫並研究室竣工
一五、一一、六　創學二百年重建十年記念式典を行ひ併せて物故講師並に物故功勞者十一人を奉祀す
同　久邇宮家より金壹萬疋を賜はる
昭和二、三、一〇　理事長永田仁助君歿す
二、四、二三　教授文學博士松山直藏君歿す、日曜朝講を廢す
四、四、一　文學士財津愛象君を聘して教授とす
四、一〇、一二　物故教授講師並に功勞者六人を奉祀す
四、六、四　今上天皇陛下大阪に行幸甘露寺侍從を差遣せらる
六、一〇、四　財津教授歿す

八、三、一　定日講義を毎週四回とす
九、三、二〇　文科講義を廢す
九、四、一　定日講義を毎週五回とす
九、六、二六　顧問文學博士内藤虎次郎君歿す
一〇、一二、一九　東久邇宮殿下台臨
一一、一〇、一　碩園先生遺集成る
一一、一〇、一〇　重建二十年式典並に物故教授顧問講師功勞者十四人を奉祀す

三　寄附行爲

第一章　目的

第一條　本會ハ左ノ方法ニ依リ、國民道德ノ進歩ニ力メ、學術ノ發達ヲ圖リ、本邦文化ノ向上ニ資スルヲ以テ目的トス

一、學術講演會ヲ開クコト
二、講演集及ビ其他圖書ノ編纂出版ヲナスコト
三、大阪先賢ノ事蹟及ビ著書ヲ調査表彰スルコト

四、奬學金ヲ支出シ、學術ノ研究ヲ奬勵スルコト

第二章　名　稱

第二條　本法人ハ懷德堂記念會ト稱ス

第三章　事　務　所

第三條　本會ノ事務所ハ大阪市東區豐後町懷德堂ニ置ク

第四章　資　金

第四條　本會ハ舊懷德堂記念會ヨリ引繼ギタル金六千圓及ビ有志者ノ寄附金ヲ以テ基本財産トス

第五條　基本財産ノ管理方法ハ理事會ニ於テ之ヲ定ム

第六條　本會ノ經費ハ基本財産ヨリ生ズル利子及事業ヨリ生ズル收入ヲ以テ之ニ充ツ

第七條　本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ、翌年三月三十一日ニ終ル

第八條　基本財産ハ理事會ノ決議ニ依リ、動産ヲ不動産産ニ或ハ不動産ヲ動産ニ變ズルコトヲ得

第五章　役　員

第九條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

理　事　七人以内　互選ニ依リ内一人ヲ理事長トス

幹　事　二　人

評議員　三十人

第十條　理事ノ任期ハ二年トス、但シ滿期再選ヲ妨ゲズ、本法人設立ノ際ニ在テハ、設立者ヲ以テ理事トシ、前項ノ期間在任ス、理事ノ任期滿了シタルトキ又ハ缺員ヲ生ジタル時ハ、評議員會ニ於テ維持會員中ヨリ改選又ハ補缺選擧ス、補缺理事ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第十一條　理事ハ本財團ヲ代表シテ諸般ノ事務ヲ管理シ、理事長之ヲ統括ス

第十二條　本法人設立ノ際ニ於ケル評議員ハ、理事會ニ於テ囑托ス、評議員ニ缺員ヲ生ジタル時ハ、評議員ニ於テ維持會員中ヨリ補缺囑托ス

第十三條　評議員ハ本財團ノ重要事項ニ關シ意見ヲ述べ、且之レガ協議ニ應ズ

第十四條　幹事の職務及任免ニ關スル規定ハ、理事會ノ決議ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第六章　維持會員

第十五條　本會ニ金壹百圓以上ヲ寄附シタル者及評議員會ノ推選シタルモノヲ以テ維持會員トス

附則

第十六條　本寄附行爲ハ理事會ノ決議ニ依リ、主務官廳ノ認可ヲ得テ變更スルコトヲ得

(三) 規則竝規定

一 講義講演規則

第一條　本堂ハ德性ノ涵養學術ノ研究ヲ目的トシ左ノ講義講演ヲナス

第二條　本堂ノ講義講演ハ定日講義、土曜講演、通俗講演ノ三種トス

第三條　定日講義ハ一ケ年ヲ三期ニ分チ、一月十一日ヨリ三月末日マデヲ第一期トシ、四月十一日ヨリ六月末日マデヲ第二期トシ、九月一日ヨリ十二月二十日マデヲ第三期トス

第四條　定日講義ノ課程及ビ教科書ハ別ニ之ヲ定ム

第五條　定日講義ノ聽講生タラントスル者ハ聽講志望書（用紙は本堂之を交附す）ヲ差出サルベシ、但二十歳未滿ノモノハ父兄若クハ長上の連署ヲ要ス

第六條　土曜講演ハ毎月毎週土曜日、通俗講演ハ毎月第三火曜日之ヲ公開ス（但七八兩月ハ休講、一月四月九月ハ十日マデ、十二月ハ二十一日以後休講）其講師及ビ演題ハ豫メ之ヲ廣告ス

第七條　講演ノ聽講者ハ聽講者名簿ニ住所職業氏名ヲ自署シ若クハ住所職業ヲ附記セル名刺ヲ差出サルベシ

第八條　本堂講演ノ聽講ハ無料トス、定日講義聽講生ハ堂費トシテ毎期ノ始メニ於テ一ケ月貳拾錢ノ割合ヲ以テ一期分宛納入スルモノトス

第九條　本堂ニ於テ特殊ノ研究ヲナサントスル者ノ爲ニ特別講義ヲナシ一定ノ期間臨時講演ヲ開クコトアルベシ其規定ハ臨時之ヲ定ム

二　素讀科規則

一、素讀科ハ孝經四書五經等ヲ課ス

一、素讀生ハ滿十二年以上十八年以下ノモノニ限ル

一、素讀生タラントスル者ハ父兄又ハ後見人連署ノ志望書ヲ差出スベシ（用紙ハ本堂之ヲ交附ス）

一、素讀科ハ毎週月、木、土曜日ノ三回午後一時ヨリ同六時マデノ間ニ於テ來堂順ニ之ヲ授ク

一、素讀生ハ授業料ヲ要セズ

一、素讀科修了者ニハ修業證書ヲ授與ス

三　懷德堂文庫閲覽規則

第一條　懷德堂文庫ハ特ニ漢學ヲ研究スル人々ノタメニ之ヲ公開ス

第二條　閲覧ヲ志望スルモノハ閲覧志望書ヲ出シ教授ノ許可ヲ受クベシ

但懐德堂聽講生並ニ堂友會員ハ志望書ヲ出スヲ要セズ文庫係ニ其旨申出デラルベシ

第三條　閲覧者ハ備付ノ名簿ニ姓名ヲ記入シ所定ノ室ニ於テ閲覧スベシ

第四條　閲覧圖書ハ堂外ニ帶出スルコトヲ許サズ

第五條　閲覧者ハ許可ナクシテ妄リニ文庫内ニ出入スルコトヲ得ズ

第六條　閲覧者ハ閲覧票ニ書名並ニ姓名ヲ記入シ文庫係ニ差出スベシ

第七條　一時ニ閲覧シ得ベキ書籍ハ五部ヲ以テ定限トス

但研究事項ニヨリテハ此ノ限ニアラズ

第八條　閲覧者ハ研究事項ニ關シ指導ヲ受クルコトヲ得

指導ヲ受ケント欲スルモノハ文庫係ヲ通ジテ其旨申出デラルベシ

第九條　同時ニ閲覧シ得ベキ人員ハ十人ヲ限リトス若シ之ニ超過スルトキハ一時閲覧ヲ謝絶スルコトアルベシ

第十條　閲覧ハ無料トス

四　懐德堂記念會奉祀規定

第一條　懷德堂記念會ハ本會ノ事業並ニ經營維持ニ功勞アリタル物故者ヲ奉祀シ毎年一回恒祭ヲ行フ

第二條　奉祀者ハ理事會ニ於テ之ヲ銓衡シ評議員會ニ協議シテ之ヲ決定ス

(三)　事　業

一　講　義

(甲)　定　日　講　義

一、目　的

定日講義は聖經賢傳及び本邦古典を講じ德性を涵養し我國民性及び國民道德の淵源を究むるに資するを以て目的とす

二、現行書目及日時

古文眞寶後集(武藤講師)	論　語(吉田助教授)	毎週月曜日(自午後七時至同九時)
周　易　本　義(大塚講師)	韓　非　子(岡山講師)	毎週火曜日(同　前)
支那古代思想史(秋月講師)	懷德堂先賢文鈔(吉田助教授)	毎週水曜日(同　前)
枕　草　子(阪倉講師)	詩　經(岡山講師)	毎週木曜日(同　前)

史記新鈔（大塚講師）　日本漢學史（武藤講師）　每週金曜日（同前）

三、講義既了書目

論語、禮記纂言抄、書經、宋名臣言行錄抄、大學衍義、古今學變、輶軒語、近思錄、周易程傳、大學（松山教授）

經子簡編、孟子、詩經（至邶風）（西村講師）

萬葉集抄、記紀歌抄（吉澤講師）

祝詞宣命抄、萬葉集選、古事記抄、古今集選、新古今集選、新葉集選、萬葉集抄、大鏡、枕草子、榮華物語（林講師）

諸子概說、荀子、曾文正公家訓（武內講師）

楚辭、詩經（自衞風）、孝經、先哲叢談、春秋左氏傳、中國文學史、論語（財津講師）

韓非子（稻東講師）

國學概論、白話文篇、曾子家語、四書音讀白話解、子思子、經解入門、白話文、淸代樸學大師列傳、水滸傳（吉田助教授）

大學、中庸、書經、論語、新撰諸子鈔（秋月講師）

神皇正統記、國史概論（佐々木講師）

尺牘灌鈔、老子（岡山講師）

靖獻遺言、孟子（大塚講師）

古事記（阪倉講師）

孝經、大學、中庸（武藤講師）

二　講演

（甲）土曜講演

一、目的

定期講演は文科に屬する諸學の高等なる學術的知識を普及し文化の向上學術の研究に資するを以て目的とす

二、現行講演題目及日時

日本建築に於ける細部の變遷　京都帝國大學名譽教授　工學博士　天沼俊一

古文書學　京都帝國大學助教授　文學士　中村直勝

（毎週土曜日午後七時ヨリ同八時半マデ）

三、既了講演題目並講師

孟子概說（十三講）	自大正五年十一月至同六年二月	京都帝國大學教授文學博士	狩野直喜
國史新話（十三講）	自同五年十一月至同六年五月	同	三浦周行
老子評論（十講）	自同六年六月至同七年一月	同	高瀨武次郎
支那通說（八講）	自同六年六月至同六年十二月	同	桑原隲藏

近世の日本（十一講）	自同七年六月 至同七年一月	同	内田銀藏
支那に於ける史の起源（十講）	自同七年六月 至同七年二月	同	内藤虎次郎
詩聖杜甫（十五講）	自同八年四月 至同七年九月	同	鈴木虎雄
「カント」の倫理學（十四講）	自同八年三月 至同七年九月	同	藤井健治郎
現代に映れる西洋古代文明（六講）	自同八年六月 至同八年四月	同	阪口昂
青年の心理及其教育（十四講）	自同九年三月 至同八年九月	同	野上俊夫
支那通說（八講）	自同八年十五月 至同八年五月	同	桑原隲藏
國史上に於ける社會問題（十六講）	自同九年六月 至同八年十一月	同	三浦周行
「カント」の前と後（十三講）	自同九年十月 至同九年四月	同	朝永三十郎
日本に於ける信仰と美術（十六講）	自同十年二月 至同九年四月	京都帝國大學助教授文學士	澤村專太郎
朝鮮の文化（十三講）	自同九年十二月 至同九年四月	同	今西龍
印度の文化と其潮流（十三講）	自同十年三月 至同九年九月	京都帝國大學教授文學博士	松本文三郎
近世支那概觀（十五講）	自同十年十一月 至同十年一月	同	矢野仁一
陸象山の學說（十講）	自同十年六月 至同十年二月	同	高瀨武次郎
世界戰爭の話（九講）	自同十年十一月 至同十年三月	京都帝國大學教授理學博士	小川琢治

日支文化關係（九講）	自同十年五月至同十年十二月	京都帝國大學教授文學博士	內藤虎次郎
西洋の藝術及藝術論（十一講）	自同十年九月至同十一年三月	同	深田康算
古代印度に於ける美術に就て（十三講）	自同十年十一月至同十一年十二月	同	榊亮三郎
道德思想の發達（十四講）	自同十一年十一月至同十一年九月	同	野上俊夫
日本文化の過程（十九講）	自同十一年四月至同十二年三月	同	原勝郎
現代教育思潮批判（六講）	自同十二年一月至同十二年三月	同	小西重直
支那史上の偉人（六講）	自同十二年四月至同十二年六月	同	桑原隲藏
論語概說（十講）	自同十二年四月至同十二年十月	同	狩野直喜
日本民族概說（十二講）	自同十二年九月至同十三年三月	同	喜田貞吉
國字の話（八講）	自同十二年十一月至同十三年四月	同	吉澤義則
日本語の由來（五講）	自同十三年四月至同十三年六月	同	新村出
有史以前の日本（五講）	自同十三年四月至同十三年六月	同	濱田耕作
周易概說（七講）	自同十三年九月至同十三年十二月	同	高瀨武次郎
古代中央亞細亞の文明（八講）	自同十三年九月至同十三年十二月	同	羽田亨
家庭教育と社會教育（五講）	自同十四年一月至同十四年三月	同	野上俊夫

日本に於ける社會生活の發達（五講）	自同十四年一月至同十四年三月	同	西田直二郎
大乘佛教の要旨（六講）	自同十四年四月至同十四年六月	同	松本文三郎
法制の發達（六講）	自同十四年四月至同十四年六月	同	三浦周行
續國字の話（六講）	自同十四年九月至同十四年十二月	同	吉澤義則
支那の政治文化及社會（七講）	自同十四年九月至同十四年十二月	同	矢野仁一
日韓上代關係史（五講）	自同十五年一月至同十五年三月	同	今西龍
藝術批判史概說（五講）	自同十五年一月至同十五年三月	同	深田康算
中世支那に移住せし西域人（四講）	自同十五年四月至同十五年六月	同	桑原隲藏
人格主義の倫理（六講）	自同十五年四月至同十五年六月	同	藤井健治郎
東西兩洋文明の藝術史的考察（七講）	自同十五年九月至同十五年十二月	京都帝國大學助教授	澤村專太郎
生命の諸相（七講）	自同十五年九月至同十五年十二月	京都帝國大學教授	川村多實二
根本佛教の大乘的意義（五講）	自昭和二年一月至同二年三月	京都帝國大學講師	羽溪了諦
宋明理學者の詩（五講）	自同二年一月至同二年三月	京都帝國大學教授文學博士	鈴木虎雄
國語の語音と語原と語法（五講）	自同二年四月至同二年六月	同	新村出
支那の古銅器について（五講）	自同二年四月至同二年六月	同	濱田耕作

婦人問題序論（七講）	自同二年九月至同二年十二月	同	野上俊夫
神社を中心としたる日本史概觀（十一講）	自同二年十月至同三年三月	京都帝國大學助教授	中村直勝
唐の文化（六講）	自同三年四月至同三年六月	京都帝國大學文學博士教授	桑原隲藏
浪漫主義の文學（十一講）	自同三年一月至同三年六月	京都帝國大學助教授	成瀨清
新カント派特にマールブルグ學派の倫理（七講）	自同三年九月至同四年一月	京都帝國大學文學博士教授	藤井健治郎
第十八世紀以降に於ける獨逸的思想の發展（七講）	自同三年九月至同四年二月	京都帝國大學助教授	時野谷常三郎
天文學上より見たる支那古代の文化（八講）	自同四年二月至同四年六月	京都帝國大學理學博士教授	新城新藏
中世の文化（十一講）	自同四年二月至同四年六月	京都帝國大學文學博士教授	三浦周行
道德と經濟（六講）	自同四年九月至同四年十二月	京都帝國大學法學博士教授	田島錦治
陽明學講話（十二講）	自同五年九月至同五年三月	京都帝國大學文學博士教授	高瀨武次郎
中觀派の佛教（六講）	自同五年四月至同五年六月	同	松本文三郎
日本封建制度發達史その比較史的研究（十講）	自同五年一月至同五年六月	京都帝國大學教授	牧健二
支那都市發達史概論（五講）	自同五年九月至同五年十一月	京都帝國大學助教授	那波利貞
農村の振興と青年の教化（七講）	自同五年九月至同五年十二月	京都帝國大學農學博士教授	橋本傳左衞門
萬葉時代の代表歌人（五講）	自同六年一月至同六年三月	京都帝國大學助教授	澤瀉久孝

支那の土地と住民（五講）	自同六年四月至同六年六月	京都帝國大學教授理學博士	小川琢治
日本國民經濟論（六講）	自同六年九月至同六年十二月	京都帝國大學經濟學教授博士	作田莊一
豐太閤（十八講）	自同六年一月至同六年十二月	京都帝國大學助教授	中村直勝
歴史上より見たる滿洲問題（五講）	自同七年一月至同七年三月	京都帝國大學教授文學博士	矢野仁一
詩聖ゲーテ（五講）	自同七年四月至同七年六月	京都帝國大學文學博士教授	成瀬清
西洋文化發達史（思想問題の一資料として）（十二講）	自同七年一月至同七年六月	京都帝國大學文學博士教授	野上俊夫
東洋倫理學（六講）	自同七年九月至同七年十二月	京都帝國大學教授文學博士	高瀬武次郎
大乘思想（七講）	自同七年九月至同七年十二月	京都帝國大學助教授	羽溪了諦
史眼に映じたる現代歐洲（五講）	自同八年一月至同八年三月	同	時野谷常三郎
宇宙の構造（五講）	自同八年一月至同八年三月	同	荒木俊馬
日本社會變革史論	同八年四月	京都帝國大學教授	牧健二
日本語原學概論（七講）	自同八年四月至同八年六月	京都帝國大學文學博士教授	新村出
日本國家史概論（六講）	自同八年九月至同八年十二月	京都帝國大學教授	牧健二
日本國民科學の提唱（六講）	自同九年一月至同九年三月	京都帝國大學經濟學博士教授	作田莊一
楠木正成（十八講）	自同八年九月至同九年六月	京都帝國大學助教授	中村直勝

支那の諸問題（六講）	自同九年四月至同九年六月	前京都帝國大學教授文學博士	矢野仁一
憲法の話（二講）	自同九年十九月至同九年十九月	前京都帝國大學教授法學博士	佐々木惣一
唐代の學制模倣と同化（九講）	自同九年十九月至同九年十二月	京都帝國大學講師	高橋俊乘
支那の佛像彫刻（六講）	自同十年三一月至同十年三一月	京都帝國大學講師	源豐宗
滿洲及朝鮮の自然地理（六講）	自同十年三一月至同十年三一月	京都帝國大學教授	中村新太郎
日本建築に於ける細部の變遷（六講）	自同十年四月至同十年四月	京都帝國大學教授工學博士	天沼俊一
精神の發達（六講）	自同十年四月至同十年六月	京都帝國大學助教授	岩井勝二郎
唐詩概說（五講）	自同十年九月至同十年十二月	京都帝國大學教授文學博士	鈴木虎雄
教育學的立場より觀たる佛教（四講）	自同十年十九月至同十年十九月	同	羽溪了諦
佛國記（七講）	自同十一年一月至同十一年三月	同	羽溪了諦
日本の陽明學（九講）	自同十一年一月至同十一年六月	京都帝國大學名譽教授文學博士	高瀨武次郎
萬葉集に見えたる攝河泉の歌枕（七講）	自同十一年四月至同十一年六月	京都帝國大學助教授文學博士	澤瀉久孝

（乙）通俗講演

一、目的

通俗講演は一般市民の常識を養ひ品性を向上せしむるを以て目的とす

二、現行題目及日時

公債政策の金融に及ぼす影響　（三講）　自昭和十一年九月至同十一年十一月　京都帝國大學教授　經濟學博士　小島昌太郎

新唯心史觀の提唱　同年十二月　同　作田莊一

（毎月第三火曜日に開く）

三、既了講演題目並講師

尊敬すべき實業家夫妻	大正八年六月	京都帝國大學教授 文學博士	坂口昂
余が大阪に就職以來經濟界の所感	同八年六月		片岡直温
黴毒の遺傳	同八年七月	大阪醫科大學教授 醫學博士	和田豐種
子供の躾方に就て	同八年七月	大阪控訴院檢事	一松定吉
デモクラシーといふ事	同八年九月	京都帝國大學教授 文學博士	藤井健治郎
大戰を顧みて	同八年九月	大阪高等商業學校教授	玉木三郎
遺傳と眼病	同八年十月	醫學博士	有澤潤
商賣人の學問所	同八年十月	文學博士	西村時彦
貨幣の話	同八年十月	造幣局技師 工學博士	甲賀宣政
戰後の大阪商人	同八年十一月	日本棉花株式會社社長	喜多又藏
家庭と化學	同八年十二月	大阪高等工業學校教授	朝日奈晃十
人生の行路	同八年十二月	大阪府主事	成田軍平

適者生存と國民道德	同九年二月	住友理事　山下芳太郎
都市計畫に就て	同九年二月	工學博士　直木倫太郎
羊頭を掲げ狗肉を賣る	同九年三月	大阪府主事　成田軍平
米國に於ける現實主義と理想主義	同九年三月	大阪府主事　赤松郁太郎
貿易の危機	同九年五月	增田正雄
仁義	同九年五月	住友總理事　鈴木馬左也
經濟生活の改善	同九年六月	大阪府技師　井上龜五郎
生活改善の原理	同九年六月	大阪府立高津中學校長　三澤糾
印度及南洋視察談	同九年七月	大阪府商工課長　百濟文輔
文化都市の建設	同九年七月	工學博士　片岡安
衡平主義	同九年十月	秦政治郎
一二の戰後問題に就て	同九年十月	住友理事　湯川寬吉
窒素工業に就て	同九年十一月	工學博士　庄司市太郎
度量衡の世の中	同九年十一月	大阪府技師　關菊治
實業上重要問題に就て	同九年十二月	大阪市立工業學校長　杉田稔
今日の經濟界	同九年十二月	大阪朝日新聞編輯局長　高原操
木村蒹葭堂を憶ふ	同十年一月	文學博士　西村時彥

山片蟠桃を憶ふ	同 十年二月	京都帝國大學教授 文學博士 内藤虎次郎
高橋作左衛門父子の事蹟	同 十年三月	同 新村出
上田秋成に就て	同 十年四月	同 藤井乙男
橋本宗吉に就て	同 十年五月	土屋元作
草間直方に就て	同 十年六月	大阪府立圖書館長 今井貫一
富永仲基に就て	同 十年十一月	京都帝國大學教授 文學博士 内藤虎次郎
尾崎雅嘉に就て	同 十年十二月	同 吉澤義則
度量衡法改正に伴ふ規格統一に就て	同 十一年一月	京都帝國大學教授 工學博士 本野亨
太陽の熱	同 十一年二月	同 理學博士 新城新藏
石炭鑛業と坑夫生活	同 十一年三月	同 工學博士 井出健六
動物の智慧	同 十一年四月	同 理學博士 川村多實二
下水の處分	同 十一年五月	同 工學博士 大井淸二
紫外線の話	同 十一年六月	同 理學博士 木村正路
飛行船の話	同 十一年九月	同 工學博士 濱部源太郎
條件論的生命觀	同 十一年十月	同 醫學博士 石川日出鶴丸
有用なる金屬に就て	同 十一年十一月	同 工學博士 近重眞澄
化學と電氣の關係に就て	同 十一年十二月	同 中澤良夫

親族の話	同十二年一月	同	法學士 宮本英雄
婚姻の話	同十二年二月	同	宮本英雄
親子關係の話	同十二年三月	同	宮本英雄
刑法の話（二講）	自同十二年四月至五月	同	宮本英俯
裁判の話	同十二年六月	同	法學博士 山田正三
商法の話（二講）	自同十二年九月至十月	同	同 烏賀陽然良
最近の法律思想	同十二年十一月	同	同 菅原眷二
普選を中心としたる政治問題	同十二年十二月	同	法學博士 市村光惠
地殼の釣合及變動	同十三年一月	同	理學博士 松山基範
人生と植物	同十三年二月	同	同 郡場寛
建築の形の變遷	同十三年三月	同	工學博士 武田五一
空中に於ける電氣の活動	同十三年四月	同	工學士 鳥養利三郎
生物の成長と其の成分との關係	同十三年五月	同	理學博士 小松茂
和室の衛生學的研究	同十三年六月	同	醫學博士 戸田正三
工業の發達と自然科學的研究	同十三年九月	同	理學博士 吉田卯三郎
疾病の起源并に其意義	同十三年十月	同	醫學博士 藤浪鑑
動物と人生	同十三年十一月	同	理學士 川村多實二

自然科學の發達	同 十三年十二月	同 理學博士	新城新藏
國民の海外發展問題	同 十四年一月	同 法學博士	山本美越乃
我國の租稅體系に就て	同 十四年二月	同 同	神戸正雄
經濟の發達（二講）	自同 十四年三月至四月	同 經濟學博士	本庄榮次郎
我國現時の財政に就て	同 十四年五月	京都帝國大學講師 法學博士	小川鄉太郎
大戰の回顧と戰後の貿易逆調	同 十四年六月	京都帝國大學教授 法學士	小島昌太郎
天運人事數無異同との說に就て	同 十四年九月	同 法學博士	財部靜治
農村問題の思想的背景	同 十四年十月	同 同	河田嗣郎
世界經濟の特質	同 十四年十一月	同 法學士	作田莊一
經濟と道德との關係及合致	同 十四年十二月	同 法學博士	田島錦治
政黨論（三講）	自同 十五年一月至三月	同 同	市村光惠
各國の政治組織（三講）	自同 十五年四月至六月	同 法學士	森口繁治
國際聯盟の話（二講）	自同 十五年九月至十月	京都帝國大學教授 法學博士	末廣重雄
國家哲學の必要	同 十五年十一月	京都帝國大學教授	田村德治
日本人の食物に對する所見	昭和二年一月	同 農學博士	近藤金助
人間に於ける遺傳	同 二年二月	同 理學博士	駒井卓
近畿の山の出來方	同 二年三月	京都帝國大學教授	中村新太郎

光化學反應と生命	同 二年四月	同 理學博士	堀場新吉
民族と果物の種類との關係	同 二年五月	同 農學博士	菊池秋雄
海の誕生	同 二年六月	同 理學博士	野藤隆治
氣候と建築	同 二年九月	同 工學博士	藤井厚二
最近の農業問題	同 二年十月	同 農學博士	橋本傳左衛門
遺傳の物質的基礎	同 二年十一月	同 理學博士	桑田義備
纖維素の化學工業特に人造絹絲に就て	同 二年十二月	同 工學博士	喜多源逸
財政の話（三講）	自同 三年一月至三月	同 經濟學博士	汐見三郎
刑法の話（四講）	自同 三年四月至六月及九月	京都帝國大學教授	瀧川幸辰
親族相續法の改正（三講）	自同 三年十月至十二月	京都帝國大學教授	末川博
植物の進化（三講）	自同 四年一月至三月	同 理學博士	郡場寛
種々の波の話（三講）	自同 四年四月至六月	同 理學博士	玉城嘉十郎
農業經濟（四講）	自同 四年九月至十二月	同 農學博士	橋本傳左衛門
行政法一般（三講）	自同 五年一月至三月	京都帝國大學助教授	渡邊宗太郎
憲法の話	同 五年四月	京都帝國大學教授法學博士	佐々木惣一
會社の話（二講）	自同 五年五月至六月	同 法學博士	竹田省
訴訟に就て	同 五年九月	同 法學博士	山田良三

自治監督	同	五年十月	京都帝國大學助教授 渡邊宗太郎
法治國の思想と教育刑主義（二講）	自同	五年十一月至十二月	京都帝國大學教授 瀧川幸辰
地球の安定と變動	同	六年一月	同 理學博士 松山基範
地球內部の狀態	同	六年二月	
地球の年齡と壽命	同	六年三月	
伊能忠敬と日本測量（三講）	自同	六年四月至六月	京都帝國大學教授 大谷亮吉
膠質の世界	同	六年九月	同 理學博士 堀場信吉
表面の化學及物理	同	六年十月	
接觸觸媒の作用	同	六年十一月	
膠質化學の工業上の應用	同	六年十二月	
財政の話（二講）	自同	七年一月至二月	同 經濟學博士 汐見三郎
財界の話	同	七年三月	
社會變革期の經濟學（三講）	自同	七年四月至六月	京都帝國大學教授 石川興二
恐慌及恐慌對策（三講）	自同	七年九月至十一月	京都帝國大學助教授 谷口吉彥
經濟統制の指導法則	同	七年十二月	京都帝國大學教授經濟學博士 作田莊一
手形法改正の話（三講）	自同	八年一月至三月	京都帝國大學助教授 大隅健一郎
政治の話（三講）	自同	八年四月至六月	同 黑田覺

相續法の話（四講）	自同 八年九月至十二月	同	近藤英吉
植物學叢話（三講）	自同 九年一月至三月	京都帝國大學教授 理學博士	郡場寛
地學叢話（三講）	自同 九年四月至六月	同	松山基範
遺傳と環境（四講）	自同 九年九月至十二月	同	駒井卓
民法の話（二講）	自同 十年一月至二月	京都帝國大學教授	近藤英吉
德川時代の裁判	同 十年三月	同 法學博士	牧健二
各國に於ける政治の諸樣相（三講）	自同 十年四月至六月	京都帝國大學教授	黑田覺
財産法に於ける二三の日常問題（四講）	自同 十年九月至十二月	同	田島順
經濟統計の諸問題（三講）	自同 十一年一月至三月	京都帝國大學 助教授 經濟學博士	蜷川虎三
民族の問題（三講）	自同 十一年四月至六月	京都帝國大學教授 文學博士	高田保馬

三、素讀

一、目的

素讀は德性の涵養並に漢學の學習に資するを以て目的とす

二、書目

孝經、四書、五經等（吉田助教授）

三、日　時

毎週月木土曜日の三回午後一時より同六時までの間に於て來堂順に之を授く

四　恒祭並記念講演

恒　祭

毎年一回舊懷德堂師儒諸先生懷德堂記念會物故諸先生並に功勞者の恒祭を執行す

（甲）祭　神

一、懷德堂師儒諸先生

三宅石菴　三輪執齋　伊藤東涯　中井甃菴　並河誠所
井上赤水　五井蘭洲　三宅春樓　中井竹山　中井履軒
中井蕉園　中井碩果　中井桐園　並河寒泉　中井柚園
懷德堂五同志

二、懷德堂記念會物故諸先生並功勞者

物故教授

松山直藏　財津愛象

物故顧問

内藤虎次郎

物故講師

内田銀藏　原勝郎　西村時彦　藤代禎輔　坂口昂

稲束猛　深田康算　波多野七藏　澤村專太郎　藤井健治郎

桑原隲藏　三浦周行　佐々木恆清　今西龍　田島錦治

物故功勞者

土居通夫　水落庄兵衞　上野理一　鈴木馬左也　小山健三

西村時彦　坂仲輔　男爵住友吉左衞門　永田仁助　男爵鴻池善右衞門

本山彦一　村山龍平　野々村政也　中橋德五郎

（乙）記念講演

毎年恒祭執行後碩學を聘して記念講演會を行ふ講演題目並に講師左の如し

敬に就きて　大正六年十月　京都帝國大學教授文學博士　藤井健治郎

大阪の過去を顧みて　同　伊庭貞剛

宋代の士風　同　懷德堂教授文學士　松山直藏

哲學的理想主義	同 七年十月	京都帝國大學教授 法學博士	朝永三十郎
權利思想	同	同 法學博士	織田萬
報恩主義と社會問題	同 八年十月	同 法學博士	田島錦治
仁義と正義人道	同	東京帝國大學教授 文學博士	服部宇之吉
歴史的眞理	同 九年十月	京都帝國大學教授 文學博士	西田幾多郎
中井竹山先生を憶ふ	同	東京帝國大學教授 文學博士	三上參次
時勢の要求を述べて儒教の活用に及ぶ	同 十年十月	法學博士	仁保龜松
儒教の我國に於ける影響	同	東京帝國大學教授 文學博士	井上哲次郎
國體擁護	同 十二年十一月	法學博士	千賀鶴太郎
儒教の修養法に就きて	同 十三年十月	東京帝國大學教授 文學博士	宇野哲人
竹山先生の經濟學說	同	京都帝國大學教授 經濟學博士	本庄榮治郎
神國てふ國民的信念につきて	同 十四年十月	東京帝國大學教授 文學博士	岡田正之
ヒユームの正義觀念（ヂヤスチス）に就て	同 十五年十一月	京都帝國大學教授 文學博士	藤井健治郎
聖諭廣訓に就て	同	同 文學博士	狩野直喜
孔夫子と知天命	同	朝鮮帝國大學總長 文學博士	服部宇之吉
熊澤蕃山の事蹟及學說	昭和二年十月	京都帝國大學教授 文學博士	高瀨武次郎
章學誠の史學	同 三年十月	京都帝國大學名譽教授 文學博士	内藤虎次郎

易傳の道德思想	同四年十月	東北帝國大學教授文學博士	武内義雄
孔子の宗教觀	同	東京帝國大學教授文學博士	宇野哲人
呂氏鄉約の大要	同五年十月	京都帝國大學教授文學博士	鈴木虎雄
誠に就て	同六年十月	東京帝國大學名譽教授文學博士	服部宇之吉
陰陽五行說と現代の科學	同七年十月	京都帝國大學總長理學博士	新城新藏
支那に於ける印度音譯字の二三に就て	同八年十月	京都帝國大學名譽教授文學博士	松本文三郎
人間性	同九年十月	同 文學博士	小西重直
漢字漢語管見	同十年十月	京都帝國大學教授文學博士	新村出
未定	同十一年十月	東北帝國大學教授文學博士	武内義雄
未定	同	京都帝國大學名譽教授文學博士	狩野直喜

五 孔子祭

大正十一年十月八日、孔子歿後二千四百年を記念せむがために、本堂講堂に於て昌平校聖堂釋奠儀注を參酌して孔子祭を行ひ、左の記念講演を行ひ、兼ねて論語義疏を校印せり。

孔子傳の一節に就きて　京都帝國大學教授文學博士　狩野直喜

論語里仁篇富與貴章講義　懷德堂教授文學士　松山直藏

六　出　版

本年迄に左の出版をなせり。

一、論語義疏

大正十一年は孔子歿後二千四百年に恰當するを以て、之を記念せむが爲に、論語義疏を校印し、講師武内義雄君專らその任に當る。

二、懷德堂考

西村時彦君の懷德堂考は曾て大阪朝日新聞に連載せられしが、刊本として世に弘布せざりしより、大正十四年十一月、本堂に於て五百部を限り重印し、末尾に懷德堂復興小史及び中井木菟麿君撰するところの懷德堂年譜を附印せり。

三、懷德堂文科學術講演集第一輯

大正十四年より毎年一回若くは數回懷德堂講演集の發刊せらるゝこととなり、定期講演の一部を編したるものは同年六月、懷德堂文科學術講演集の名によつて第一輯を東京弘道館より發行せり。

四、懷德堂百科通俗講演集

通俗講演の一部を編したるものは前記の懷德堂文科學術講演集と同じく、同年同月、懷德堂百科通

俗講演集の名によりて、第一輯を東京弘道館より發行せり。

五、北宋五子哲學

教授文學博士松山直藏君の遺著なり、昭和六年三月二十五日刊行せり。

六、碩園先生遺集

文學博士西村時彦君の遺著なり、文集三卷、詩集三卷、屈原賦說上卷共に五冊となし昭和十一年十月一日刊行せり。

七　奬　學

本會は永田仁助君が漢學奬勵のために寄附せる金五萬圓を基金として、年々基金より生ずるところの利子を以て、漢學研究者を補助奬勵す。

八　文　庫　公　開

本會は懷德堂文庫を公開して漢學研究者に便す、該文庫は故西村時彦君を記念せむがために、故西村博士記念會より本會に寄附せられたる同博士舊藏書全部より成る碩園記念文庫及本會藏書の外、愛甲兼達氏の委託に係る故籾山衣洲翁舊藏書全部を藏儲す。

(四) 懷德堂學年暦

一月一日　新年
一月三日　元始祭
一月十日　冬季休業終
一月十一日　第一期講義始
二月十一日　紀元節
三月三十一日　第一期講義終
四月一日　春季休業始
四月三日　神武天皇祭
四月十日　春季休業終
四月十一日　第二期講義始
四月二十九日　天長節
六月三十日　第二期講義終
七月一日　夏季休業始
八月三十一日　夏季休業終
九月一日　第三期講義始
秋分日　秋季皇靈祭
十月五日　本堂記念日
十月十七日　神嘗祭
十一月三日　明治節
十一月廿三日　新嘗祭
十二月二十日　第三期講義終
十二月廿一日　冬季休業始
十二月廿五日　大正天皇祭

(五) 顧問、職員、講師

顧問

京都帝國大學名譽教授　文學博士　狩野直喜

職員

教授　關

助教授　吉田鋭雄
書記　藤塚誠二
文庫係　稲葉實穂

講師

東北帝國大學教授　文學博士　武内義雄
大阪高等學校教授　文學博士　秋月胤繼
　　岡山源六
第三高等學校教授　文學士　阪倉篤太郎
　　文學士　大塚末雄
　　文學士　武藤長平

（六）財團法人懷德堂記念會役員

理事

小倉正恒（理事長）　今井貫一（常任理事）
上野精一　木間瀨策三　江崎政忠

幹事

成田軍平　岡野廉平

評議員

林市藏　侯爵大久保利武　山口吉郎兵衛　男爵藤田平太郎

佐多愛彦　杉村正太郎　廣岡惠三　村山長舉

永田仁助　堀越壽助　森平兵衛　阿部房次郎

川田順　加藤晴比古　山崎一保　楠本長三郎

平田讓衛　稲畑勝太郎　野村德七　佐々木駒之助

坂田幹太　勝本鼎一　中根貞彦　岡實

奥村信太郎

舊役員

理事　水落庄兵衛　廣岡惠三　西村時彦　坂仲輔

永田仁助　田中隆三　野々村政也

幹事　上松寅三　谷川清澄　尾崎保之助

評議員　芝川又右衛門　高谷恒太郎　島村久　土居通夫

横山助成　高見龜　宮島茂次郎　柴直太郎

三邊長治　水落庄兵衛　平賀敏　上野理一
黑木吉郎　鈴木馬左也　殿村平右衛門　芦田順三郎
小山健三　今西林三郎　福士末之助　西村時彦
安原舜一　中田錦吉　住友吉左衛門　池上四郎
木間瀨策三　小畑富記　中川望　廣海二三郎
平瀨三七雄　山本理一　野々村政也　愛甲兼達
鴻池善右衛門　湯川寛吉　土屋元作　本山彦一
高木利太　樋口三郎兵衛　村山龍平　中橋德五郎
勝本忠兵衛　池原鹿之助　關一　小林利昌
岩井勝次郎　弘世助太郎

（七）三年以上聽講繼續者及素讀修了者

一　定日講義聽講生

二十年繼續者

井上正美　岡田玄碩　野口幸雄　平野得三

十八年繼續者

山本栖信　太田勘兵衛

十四年繼續者

酒井全太郎

十三年繼續者

飯島溜三郎

十二年繼續者

田中貞雄　中川幸三

十一年繼續者

佐野靜香

十年繼續者

小沼量平　坂田廣吉

九年繼續者

岩淵賢治　仲田應弘　松村太郎　河野清光

八年繼續者

不破重三　佐野鈴子　林田良平

七年繼續者

白井久吉　今西茂喜

六年繼續者

高梨一雄　竹田義一　今川せい　春原咲子

五年繼續者

大阪金太　古下秀夫　高田伊三郎　橋詰智三　千葉傳次

音代節雄　吉田清德　小松熊之助　稻田穰　守口虎之助

高畑ハル

四年繼續者

青木潤　石井宗一　井上恂　嚴本生次　高砂清七

增池義全　貝田四郎　大森春村　寺部君子　中納愛子

日野田正英　井上末子　吉本松夫　桑原直子

三年繼續者

天野元之助　阿部剛一　岡部和一郎　大塚鋼子　鍛冶屋圓三

酒井實　林滿子　三輪時雄　三輪丁羅福　森角弘夫

中村傳一　內田利一　山本富三郎　高橋八作　沖本義見

平田武藏　奥宮貞子　濱地富美子　直木しげ

二　文科講義聽講生

（昭和九年三月廢止）

十二年繼續者

野口幸雄　岡田玄碩　山本楢信　久保田昇

八年繼續者

林田安平

七年繼續者

酒井金太郎

六年繼續者

松村太郎　平野得三

五年繼續者

井上正美　三木幸夫

四年繼續者

今川せい　中川幸三　村上信三　岡田主次　野田三郎

太田勘兵衞　今西茂喜　松永重臣

三年繼續者

竹田義一　不破重三　岩淵賢治　千葉傳次　三木喜三郎

高橋八作　桑原直子

三素讀修了者（修了順）

小西勝雄　後醍院良正　西村康哉　渡邊十郎　光吉積男
天野元之助　山本又一　稲田朝美　森井康太郎　中尾謙吉
岡田長三郎　京極與作　神納庄一　宇野新逸　京極與四一
佐々木洋士男　今川ふさ　河島正一　佐々木徹造　岩淵正一
宇野要次　伊吹花子　今井猷次　小笹圭治　伊吹千惠子
増田道夫　紀之本道夫　野口祥子　小栗清勝　岩淵十三
津和津喜子　中納愛子　御船正元　稲葉實穂　別府兼一
三木蘊　生田嘉藏　森義見　佐野鈴子　山本勝巳
春原映子　野口悦子　飯島淺子　別府泰久　生田宏三
高橋幹一

附　錄

懷德堂堂友會

堂友會は、懷德堂聽講生及び曾て聽講生たりし人々より成れる同志の一團にして、相互の親睦切磋を目的とするものなり。大正十二年六月一部の有志によりて發起せられ、多數の贊同を得、同十一月四日懷德堂恒祭の日に發會式を擧げ、會則を定め、教授を推して會長とし、吉田講師に請ふて主幹を囑し、幹事を定めて會の成立を告ぐ。爾來會則に定むるところの行事を實行して、其の目的を達成すると同時に、會員協力一致して堂の爲めに盡すところ鮮少なりとせず。現在會員九十餘名なり。趣意書幷に會則左の如し。

懷德堂堂友會設立趣旨

懷德堂開講以來茲ニ七年、其ノ間聖賢ノ教ヲ聽キテ之ヲ喜ブモノ蓋數百人、想フニ吾人ト道ヲ共ニシ樂ヲ同ウスルモノ亦尠少ナラザルベシ。然レドモ每講時ヲ計リテ經筵ニ列シ、講終リテ直チニ解散スルヲ以テ、同人盍簪シテ相語リ胥樂ムノ機會ナキヲ惜ム。是ヲ以テ吾人敢テ自ラ揣ラズ堂友會

ヲ起シテ此ノ缺陷ヲ補ヒ、以テ相互ノ親睦ヲ厚ウセント欲ス。同感ノ諸彦奮テ賛翼セラルレバ幸甚

大正十二年六月

發起人

飯島溜三郎　岡田玄碩　中川幸三　井上正美
野口幸雄　太田勘兵衞　山本楢信　小沼量平
小松熊之助　青木潤　坂田廣吉　平野得三

堂友會會則

第一條　本會ヲ堂友會ト稱シ懷德堂聽講者及ビ素讀生幷ニ曾テ聽講者タリシモノヲ以テ組織ス

第二條　本會ハ懷德堂ノ趣旨ニ遵ヒ德性ノ涵養智識ノ向上及ビ堂友ノ親睦ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第三條　本會事務所ヲ懷德堂內ニ設ク

第四條　年數回適當ノ日ニ於テ茶話會ヲ開キ學術ノ研究討論及ビ相互ノ意見交換ヲナス

第五條　年數回適當ノ日ニ於テ探勝會ヲ催ス費用ハ參加員ノ負擔トス

第六條　適當ノ年ヲ以テ懷德堂ニ於テ釋奠ヲ行フ

第七條　每年一回會報ヲ發行シ堂ノ狀況會員ノ寄稿幷ニ會員ノ動靜ヲ揭載ス　但シ必要ニ應ジ臨時

増刊スルコトアルベシ

第八條　會員ハ懷德堂恒祭ノ祭事幷ニ用務ヲ助クルモノトス

第九條　會員ハ會費トシテ毎年金壹圓貳拾錢ヲ醵出スルモノトス

第十條　本會ニ會長壹名、主幹壹名、幹事七名ヲ置キ會務一切ヲ處理ス　但シ幹事ノ任期ハ一ケ年トシ適當ノ日ニ於テ改選ヲ行フモノトス

第十一條　本會ニ名譽會員ヲ置キ懷德堂記念會講師幷ニ理事ヲ推選ス

懐德堂記念会役員職員表

紐井会員（昭和九年九月現在）

◎理事

小倉正恒（理事長）
上野精一
江崎政忠

◎評議員

[redacted]
男爵 藤田平太郎
林 市藏
杉村正太郎
村山長挙
永田仁助
堀越壽助

[redacted]
侯爵 大久保利武
佐多愛彦
廣岡恵三
[redacted]
[redacted]
森平兵衛

山口吉郎兵衛

今井貫一（常務理事）
木間瀬策三

[redacted]
奥村信太郎
坂田幹太
中根貞彦
弘世助太郎
勝本鼎一
[redacted]

阿部房次郎
加藤晴比古
楠本長三郎
稲畑勝太郎
佐々木駒之助

川田順
山崎一保
平田譲衛
野村徳七
岩井勝次郎

◎幹事

成田軍平

岡野康平

◎職員

助教授 吉田鋭雄
講師 秋月胤継
講師 大塚末雄
講師 阪倉篤太郎
他二書記一名 文庫係一名

講師 武内義雄
講師 岡山源六
講師 武藤長平

昭和十一年十月一日印刷發行　（非賣品）

大阪市東區豐後町

財團法人　懷德堂記念會